所蔵／広島平和記念資料館

原爆投下前の朝

原爆が投下される直前の朝の風景。
よく晴れた1945年（昭和20年）8月6日の朝、外で3歳と5歳の弟たちが飛行機に向かって手を振っていた。その様子を窓から見ている。
しかし、日本のものだと思っていたその飛行機は、実はアメリカのものだった。

被爆体験証言者　岡田　恵美子（おかだ　えみこ）氏　　**絵の作者**　岡島　愛（おかしま　あい）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

閃光

原爆投下直後。自宅内で見た赤い光と、爆風によって割れ、飛び散る窓ガラス。

被爆体験証言者　笠岡　貞江（かさおか　さだえ）氏　　**絵の作者**　小川　美波（おがわ　みなみ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

部屋一面に突き刺さったガラスの破片

原爆が投下され、その爆風で家の窓ガラスが全て割れ、その破片が部屋一面に隙間（すきま）なく突き刺さっている様子。

被爆体験証言者　小倉　桂子（おぐら　けいこ）氏　　**絵の作者**　蔡　茹夢（さい　うむ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

8月6日の空

14歳の時に、練兵場で被爆した時の様子。原爆が炸裂して、青い夏の空に、白く巨大なきのこ雲が現れた。

被爆体験証言者　國重　昌弘（くにしげ　まさひろ）氏　　**絵の作者**　坂本　茜（さかもと　あかね）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

橋のたもとの被爆者が私を見つめている

被爆後帰宅する時、橋のたもとに行くと、被爆したたくさんの人々が集まっていて、自分を探しに来た家族がいないかとこちらをうかがっている。

被爆体験証言者　李　鍾根（イ　ジョングン）氏　　**絵の作者**　倉重　侑季（くらしげ　ゆき）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

ああ！ 幽霊（ゆうれい）だ!!

父のために畑にトマトを取りに走って行く時、ふと顔を上げた瞬間、白い幽霊の行列が目の前を行進していた。その場は逃げたが、後から考えてみると、それは皮膚（ひふ）がはがれて垂れ下がった腕を前に出して歩く、灰をかぶった被爆者であった。

被爆体験証言者　笠岡　貞江（かさおか　さだえ）氏　　**絵の作者**　髙山　愛季（たかやま　あき）氏

所蔵／広島平和記念資料館

朝一緒に遊んでいた友達の姿

朝一緒に遊んでいた友達と避難（ひなん）先の古市（ふるいち）のお寺で会った場面。この友達は、二、三日後に死亡したと後に聞いた。数分の違いで被爆状況が異なり、生死の分かれ道となった。

被爆体験証言者　寺本　貴司（てらもと　たかし）氏　　**絵の作者**　西川　幸（にしかわ　さき）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

道に転がる屍（しかばね）

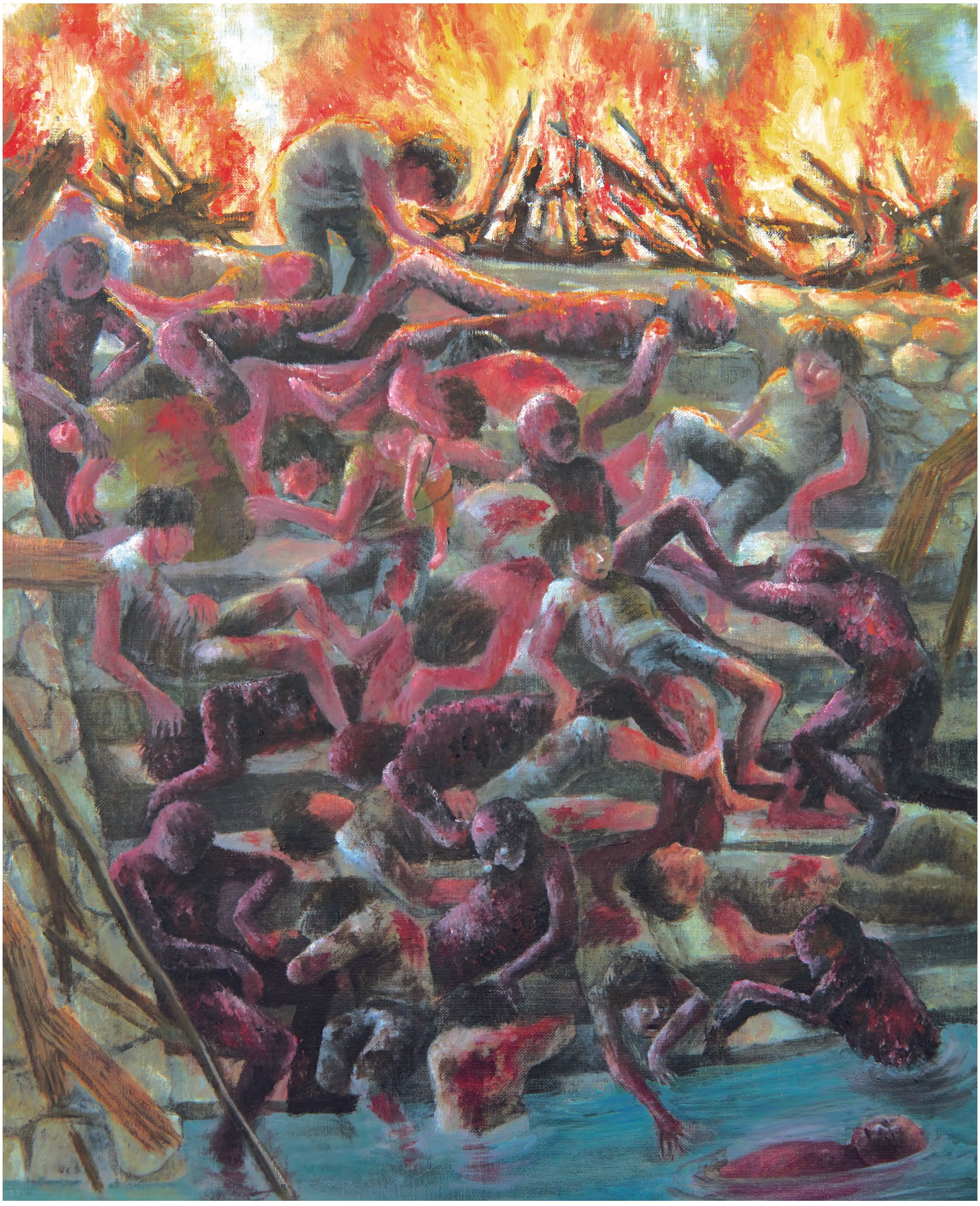
8月7日（原爆投下の翌日）、姉二人を探し入市する。矢賀（やが）駅から母と一緒に4、5時間歩いて市内に辿り着く。道路一杯に足の踏み場のないほど沢山の死体が転がる場所があった。

爆風や熱線を受けた人間の体は大きく膨（ふく）らみ焼け爛（ただ）れていて、男女の区別もつかなかった。茶褐色（かっしょく）の死体は仰向けに倒れていて、その眼球は流れ出て、舌も三角状の炭になっていた。内臓も流れ出て黄色に…。一人一人名前があったであろう死体を跨（また）ぎ、躓（つまず）きながら、母親にしがみついて歩いた時の恐怖におののいた記憶。

被爆体験証言者　河野　キヨ美（こうの　きよみ）氏　　**絵の作者**　門脇　友春（かどわき　ともはる）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館



炎から逃れ水を求めて雁木（がんぎ）に集まってきた人々

原爆が投下された日の午前9時頃の天満（てんま）川。炎から逃れてきた人、怪我をし、助けを求める人、水を求める人、黒く焼け焦げて亡くなったたくさんの人達が雁木で足の踏み場もないほど横たわっている惨状（さんじょう）。その中には赤ん坊を背負ったまま息絶えた母親の姿もあった。

被爆体験証言者　大田　金次（おおた　かねじ）氏

絵の作者　松田　優奈（まつだ　ゆうな）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

被爆した馬

夕方4時頃に見た、広島大学の塀が爆風で倒れて、その瞬間に馬の口から爆風が入り、目の玉が飛び出している様子。

被爆体験証言者　李　鍾根（イ　ジョングン）氏　　**絵の作者**　桂木　晋作（かつらぎ　しんさく）氏

所蔵／広島平和記念資料館

爆風で亡くなった女性

原爆投下後の２日目の朝。爆風で飛ばされ、橋の欄干（らんかん）の間に座るようにはまり、亡くなっていた２人の女性。女性は爆風などによって腕が無くなり、火傷をしている。左の女性はとても苦しそうな表情をしていた。

被爆体験証言者　新宅　勝文（しんたく　かつふみ）氏　　**絵の作者**　河﨑　海斗（かわさき　かいと）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

建物の下敷きになった友達と私

原爆によって倒壊（とうかい）した建物の中から抜け出そうとしている場面。
友達の足だけが見え、木材をどかそうとしている。

被爆体験証言者　梶本　淑子（かじもと　よしこ）氏　　**絵の作者**　髙橋　舞香（たかはし　まいか）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

「友達を助けてくれ!」「火が廻(まわ)って来たぞ、逃げろ!」

爆心地から800m余りの処にあった木造平屋(ひらや)の広島一中校舎は、一瞬にして倒壊(とうかい)し、多くの生徒達は倒壊校舎から脱出することが出来なかった。私は奇跡的に大きな怪我もなく抜け出す事ができ、近くにいた数人の友人を助け出した。

薄明かりの中、倒壊したトラス（三角形の屋根の骨組み）と柱の間に脚を挟まれて空中にぶら下がり助けを求めている友人の悲鳴が聞こえ、彼を助けようと試みたが、一人では脚を外す事は出来ない。誰か助けを求めようとあたりを見渡すと、窓際の席にいた友が、頭から顔にかけて無数のガラス片が刺さり血みどろの頭にゲートルで止血して呆然(ぼうぜん)と立っている。

宙吊りになった友を「助けてくれ!!」と必死で叫んだが、彼は「火が廻って来たぞ、逃げろ!」と口から血を吐きながら恐ろしい顔で叫んだ。

倒壊校舎の下では脱出できないことを悟った生徒達は煙の臭いを嗅いで死を覚悟したように「天皇陛下万歳!」「広島一中万歳!」と叫び、それはやがて「君が代」の合唱から校歌「鯉城(りじょう)の夕べ」の合唱へと変わっていた。

助けられなかった友達に掌(てのひら)を合わせて「申し訳ない、許してくれ!」と涙ながらに詫(わ)びつつその場から逃げるしかなかった。

被爆体験証言者　兒玉　光雄（こだま　みつお）氏　　**絵の作者**　宮本　陽菜（みやもと　ひな）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

忘れられない～あの眼

倒れた長い塀に腰まで挟まれ、髪を振り乱しながら助けを求めている婦人に足をつかまれ、その手を振り払った場面。

被爆体験証言者　兒玉　光雄（こだま　みつお）氏　　**絵の作者**　富田　葵天（とみた　そら）氏

所蔵／広島平和記念資料館

大芝公園へ負傷した友人を運ぶ

友人と建物から這い出た後、4人で負傷した友人を担架で運んでいるところ。

大芝公園には、生きているか死んでいるか分からない被爆者が大勢いた。

原爆が投下された後の昼ごろの天気は快晴で、公園の木々の葉も生い茂っていた。その中で、疲れ切っている4人は負傷した友人を助けようとしていた。

被爆体験証言者　梶本　淑子（かじもと　よしこ）氏　　**絵の作者**　出上　達也（でがみ　たつや）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

避難する家族と7歳の私

両側の家々は倒壊し、瓦やガラス片の飛び散っている道路を、市内西部の安全な場所を求めて、無我夢中で避難した。場所は現観音小学校（当時広島二中）近く。

被爆体験証言者　川崎　宏明（かわさき　ひろあき）氏　　**絵の作者**　三坂　日奈子（みさか　ひなこ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

瓦礫（がれき）の上を歩く親子

原爆投下から3日後、叔父の家から4km離れた我が家まで、母が4歳の私の手を引きながら、生後9か月の妹を抱きかかえ、リュックを背負って死体と瓦礫の上を歩いているところ。

被爆体験証言者　近藤　康子（こんどう　やすこ）氏　　**絵の作者**　新宅　杏袈（しんたく　きょうか）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

死んだ我が子を背負う若いお母さん

避難（ひなん）の列の中に、若いお母さんがいた。血まみれの顔で、誰が見ても既に死んでいる子どもを背負っている。「誰か、この子にママ（ご飯）を食べさせてください。水を飲ませてやって下さい」と一人ひとりにすがる。

しかし、誰にもどうしてあげることもできない。自分のことを守ることで精一杯だった。

被爆体験証言者　岸田　弘子（きしだ　ひろこ）氏　　**絵の作者**　津村　果奈（つむら　かな）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

生死不明の人たちを踏み分けながら逃げる

爆心地から2kmの広島駅（全焼全滅区域）で両親と共に被爆した。

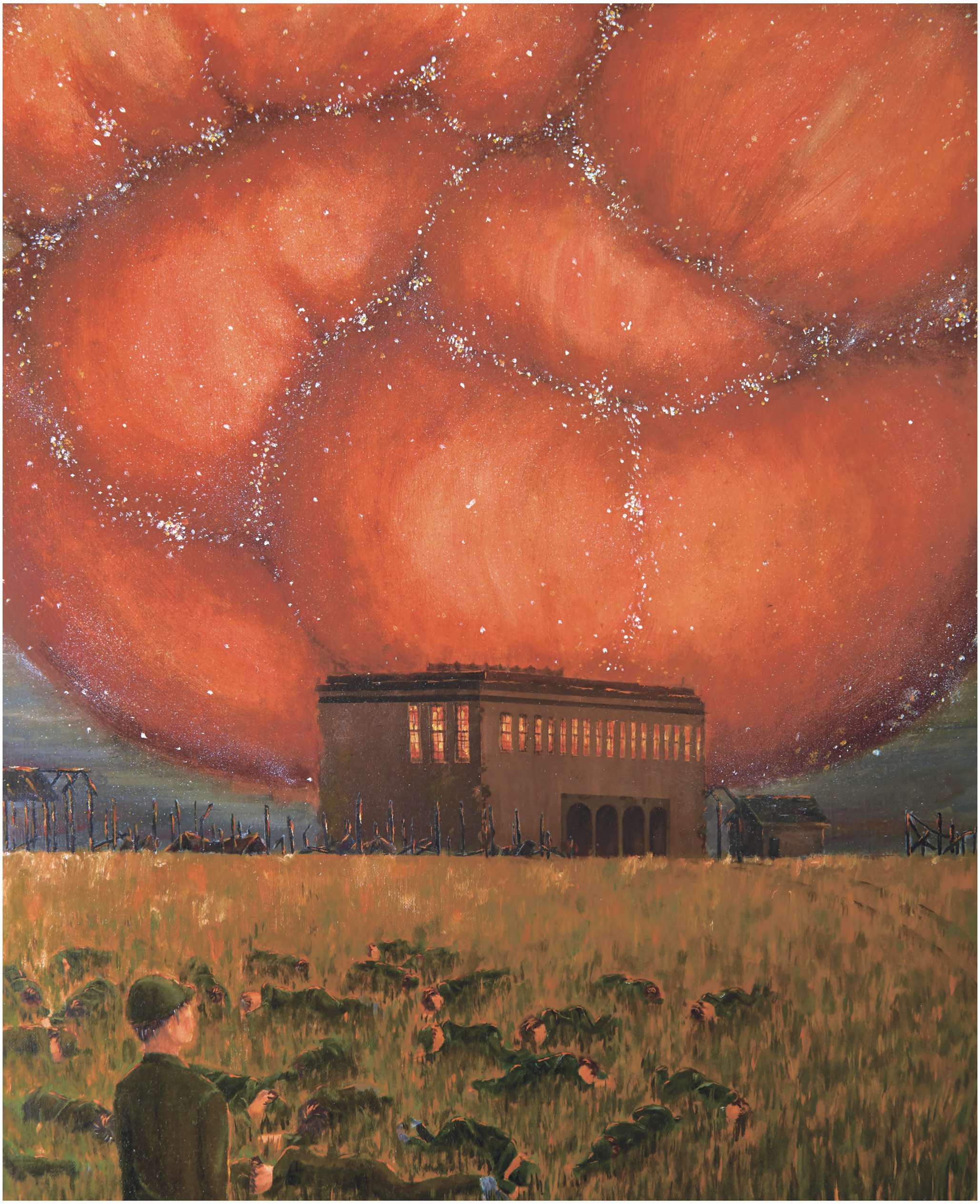
この絵は、迫ってくる炎から逃れる場面を描いている。瓦礫（がれき）をかき分けて這（は）い出ると、周囲は薄暗く、遠くの方まで見ることができなかった。しかし、周りにあった建物はことごとく消え失せ、人の気配も感じられなかった。付近にじっと目を凝（こ）らすと、建物の下敷きになったり、全身に酷い傷を負い、転がったまま身動きしない人たちが大勢いた。

父や私たちは、メラメラと舐めるように追いかけてくる炎から逃れるために、このような転がったままの体を踏み分けながら逃げるしかなかった。生死の境をさまよう数え切れない人々を目の当たりにしながら、誰も救うことのできなかったことを思うと、今も無念さで一杯だ。

被爆体験証言者　原田　浩（はらだ　ひろし）氏　　**絵の作者**　山土　莉奈（やまど　りな）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館



東練（れんぺい）兵場からみた巨大な火災

広島県立広島第二中学校２年生二百数十人は、8月6日朝、東練兵場で芋畑の草取り作業をするために集合していた時に被爆し、強烈な熱風でみんな吹き飛ばされた。割と早く気づき立ち上がって見ると、広島駅の方向に、巨大なピンク色に輝く火炎がもの凄い勢いで湧き上がっていた。爆心地から約2.5kmの場所。

被爆体験証言者　山本　定男（やまもと　さだお）氏　　**絵の作者**　石田　菜々子（いしだ　ななこ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

逃げ惑(まど)いながら水を求めて～防火用水に群がってみな亡くなっていった～

原爆投下直後の広島駅周辺の様子。

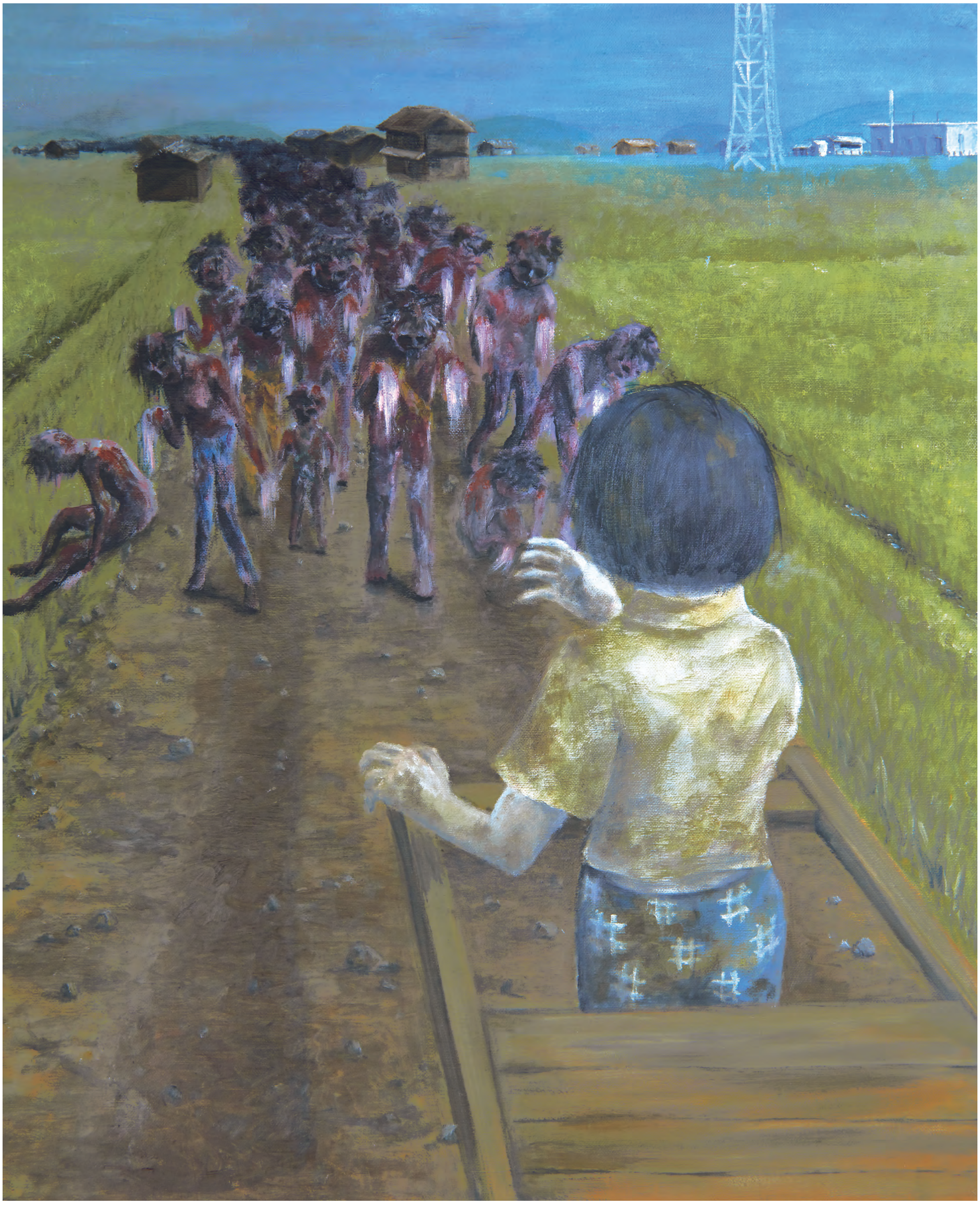
業火(ごうか)のなか人々は水を求めて防火用水に深く頭を突っ込み、そのまま亡くなっていった。本当に地獄(じごく)の有様だった。

防火用水から引きずり降ろされ横たわる人々もいる。そのなかに1人の小さな子供が懸命(けんめい)に水を求めている。しかし、業火は猛威(もうい)をふるい人々に迫りくる。

被爆体験証言者　田川　康介（たがわ　やすすけ）氏　　**絵の作者**　岡本　実佳枝（おかもと　みかえ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館



私は地獄に迷い込んだんじゃろうか

広島市郊外、西原にあった田んぼの中の一本道。被爆当日、大火傷をした母と弟を乗せるために、大八車を引いて爆心地の方向へ、一人でその道を歩いていた。（当時13歳）

すると前から、ゆらゆらとうごめく黒い集団が近づいてくるのが見えた。今にも倒れそうな人、指から何かをぶら下げている人、泣く元気もない子ども、道端で崩れるように座り込む人。被爆し、大火傷を負った人達の集団だった。

目の前の悲劇的な光景に、こう感じた。「生き地獄だ」と。

被爆体験証言者　篠田　恵（しのだ　めぐみ）氏　　**絵の作者**　宮本　陽菜（みやもと　ひな）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

ひどい火傷を負ったおじさん

自宅の縁側にいると、下着姿のおじさんが布団を1枚かついで庭に入ってきて、縁側に倒れ込んできた。（当時7歳）
おじさんはひどい火傷で、肩から垂れ下がった火傷をした皮膚が、焼けた服のように見えた。
そのおじさんは次の日の昼過ぎに救護所で亡くなった。

被爆体験証言者　山本　玲子（やまもと　れいこ）氏　　**絵の作者**　山野　一真（やまの　かずま）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

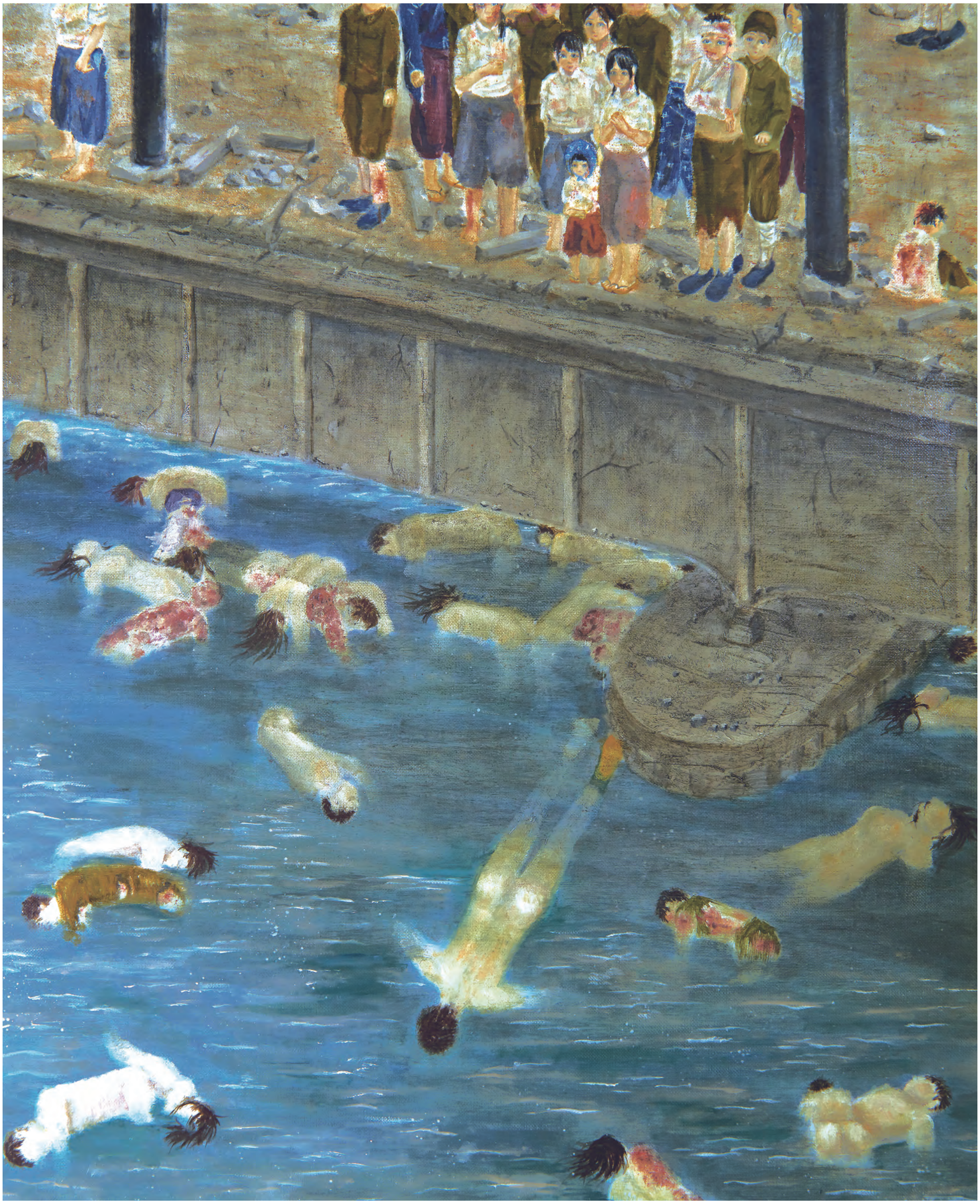
自宅の前で黒い雨に遭（あ）う自分

自宅近くで被爆した後、家の前で黒い雨に遭った。（当時8歳）白いブラウスに落ちた黒い汚れを触ると、ベタベタしていて、雨だと気付いた。

被爆体験証言者　小倉　桂子（おぐら　けいこ）氏　　**絵の作者**　市川　月穂（いちかわ　つきほ）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館



御幸橋より　波に漂う屍

芸備線矢賀駅より入市。たくさんの死体を跨いで歩いた。比治山橋の両側に、川から引き揚げた死体がずらりと並び、筵がかけてあった。筵の下からは呻き声や「水を下さい」という声がしていた。

姉の勤める日赤病院内は大勢の血まみれの怪我人がのたうち回り阿鼻地獄だった。宇品の姉を探すために渡った御幸橋から見る川面には、俯いたり、仰向いたりした水死体がたくさん波にゆらゆらと漂っていて、物言わぬ人々の酷い哀れな姿は、今も眼に焼き付いている。

被爆体験証言者　河野　キヨ美（こうの　きよみ）氏　　**絵の作者**　石田　菜々子（いしだ　ななこ）氏

所蔵／広島平和記念資料館

川で亡くなった人々を収容する兵士

原爆ドームそばの元安川には、猛火から逃げようとした人や、被爆して水を求めた人たちなど、たくさんの被爆者の死体が流れていた。被爆から６日後、兵士たちは小さな舟で死体を収容した。（爆心地から200メートルの場所）

被爆体験証言者　浅野　温生（あさの　よしお）氏　　**絵の作者**　加藤　詩温（かとう　しおん）氏

所蔵／広島平和記念資料館

日赤病院前の無傷の死体

8月8日午後、やっと逃げてきた日赤病院前の前庭には蘇鉄（そてつ）を囲むように被爆者の死体が転がっていた。たくさんある死体の中に、自分と同い年くらいの県立商業の生徒が横たわっていた。

火傷も傷もないきれいな姿だったが、兵士がスコップで転がすと、ツーっと赤い血がその口から流れた。その時初めて、その学生が死んでいたことが分かってショックだった。（爆心地から1.2キロメートルの場所）

被爆体験証言者　浅野　温生（あさの　よしお）氏　　**絵の作者**　前田　葉月（まえだ　はづき）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

ヒロシマの最も長い夜（地獄の炎ときのこ雲の残塊）

15歳だった私は、向洋の自宅付近の森に避難して一夜を過ごした。午後8時頃になっても赤い炎に染まった広島市上空では、きのこ雲が真っ白に盛り上がり、その中には稲妻が光っていた。夢の様な光景だったが、数万人の方々が亡くなった、痛ましい、長い夜だった。

被爆体験証言者　中西　巖（なかにし　いわお）氏　　**絵の作者**　河元　愛香（かわもと　まなか）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

早稲田（わせだ）神社から見た8月7日の広島市内の風景

原爆投下後の8月7日の朝、自宅の近所にあった早稲田神社から眺めた広島市内の光景。至る所で死体を焼く煙が上がっている。ほとんどの建物が崩壊（ほうかい）しており、まさに焼け野原といった様子だった。崩壊していない数少ない建物の中で、ちょうど正面に見えた福屋（旧）と中国新聞社がとても強く印象に残っている。

高い建物が少ない分、海が近く感じられ、「海まで歩いていけそう」と思った。

被爆体験証言者　小倉　桂子（おぐら　けいこ）氏　　**絵の作者**　久津間　紗也（くつま　さや）氏

所蔵／広島平和記念資料館

くちびるの潰(つぶ)れた友達

8月8日、比治山(ひじやま)にある半地下式の防空壕(ぼうくうごう)の中で、建物疎開(そかい)作業中に被爆し、大火傷を負った中学生の火傷で潰れた口に、救助のおばさんが缶詰のミカンを流し込んでいた。

おばさんは泣きながら「カタキをとってあげるけんね」と励(はげ)ましていた。

被爆体験証言者　浅野　温生（あさの　よしお）氏　　**絵の作者**　奥野　天葵（おくの　てんき）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

陸軍共済病院前の風景

現在の県立広島病院前の道にむしろを敷いて、原爆で火傷を負った人々を寝かせている様子。今でも、その様子を風景としてだけでなく、においとともに覚えている。

被爆体験証言者　渡邉　美代子（わたなべ　みよこ）氏　　**絵の作者**　秋元　はづき（あきもと　はづき）氏

被爆体験証言者と高校生との共同制作による「原爆の絵」

所蔵／広島平和記念資料館

力尽きた人々

火の手から逃げた先の福島川の河原で見た、大火傷を負った人々と、救出に来た軍人の様子。遺体を火葬するため、木などを運んだ。足の踏み場もないほど、多くの人が倒れていた。

被爆体験証言者　朴　南珠（パク　ナムジュ）氏　　**絵の作者**　杉江　湧愛（すぎえ　ゆめ）氏

所蔵／広島平和記念資料館

家族を火葬する人たち

皆実町の被服支廠近くの蓮田（ハスを栽培する田）のほとり、やっと見つけたわが子の死体を、道路わきで火葬にする遺族。原爆直後、お坊さんも寺も火葬場もなかった。（爆心地から2.5キロメートルの場所）

被爆体験証言者　浅野　温生（あさの　よしお）氏　　**絵の作者**　亀髙　菜那（かめたか　なな）氏

所蔵／広島平和記念資料館

首筋のうじ虫を取っている母の姿

家で、火傷を負ったところに赤チンという薬を塗って治療（ちりょう）していたが、首の後ろが塗りづらい上に、薬が枕に吸われてしまうせいで治りが遅く、肉が腐（くさ）ってうじがわいてしまった。そのうじを取り除くために、母が「아이고（アイゴ）」と叫び、泣きながら箸でうじを取ろうとしている。

被爆体験証言者　李　鍾根（イ　ジョングン）氏　　**絵の作者**　久保　友莉乃（くぼ　ゆりの）氏

所蔵／広島平和記念資料館

吹き出物の治療（ちりょう）

被爆時、ガラスで怪我をした。傷が治り、翌年に体のあちこちに吹き出物ができた。その傷口からは膿（うみ）が出ず、右腕に3つの穴があき、そこから膿がどんどん出た。治るのに4か月以上かかった。

放射線のことは知らなかったので、お祖母さんが、毒ガスが出たネ、と言った。原爆の後遺症（こういしょう）だと思う。薬はなく、どくだみをもんだ汁を付けたり、干したものをお茶にして飲んだ。

被爆体験証言者　笠岡　貞江（かさおか　さだえ）氏　　**絵の作者**　富士原　芽依（ふじわら　めい）氏